

2時間も早かった韓国対策本部

ニッポンで大地震——の一報に直ちに反応したのはスイス、フランスだけではなかった。韓国・ソウル市。午前七時半、大統領官邸（青瓦台）隣的首相公邸では、首相李洪九（イ・ホング）（六〇）、外相孔魯明（コン・ノミョン）（六三）ら閣僚が、真剣な表情で朝食会に臨んでいた。議題は日本の地震だった。

李はこの朝、庭で体操しながら日程を考え、自室に戻った。七時、民放MBCニュースで地震を知る。激しく揺れるNHK神戸放送局の映像、紺の背広のアナウンサー孫石熙（ソン・ソッキ）（五九）が「日本の関西地方でマグニチュード7.2の大地震が発生、被害甚大の様様です。詳しいニュースが入り次第、お伝えします」と述べた。関西には多くの同胞がいる。李は大統領金泳三（キム・ヨンサム）（六四）に指示を仰がねばと考えた。

外相の孔は昨年十二月、駐日大使から転任、外務省きつての日本通だ。MBCニュースよりも早くNHK衛星放送で地震を知り、七時過ぎには駐日大使館からも情報が入る。「すごい地震のようです」の一報に柔らかな物腰と笑顔は消えた。在任中、神戸に何度か足を運んでおり、知人の顔や街の風景が浮かぶ。神戸総領事館は音信不通。関西には約三十万人、阪神間には約八万五千人の同胞がいるのに、その安否がつかめない。

朝食会が始まると、孔は「何か支援を考えてほしい。村山首相にお見舞いの電報を」と、大統領に進言することを提案。「今回の同胞救援には、政府が一丸となる必要がある」と付け加えた。

李は「被害状況を把握、各省庁とも支援対策を協議するように」と各閣僚に指示した。日本ではこの時、首相の村山はまだ官邸入りしていない。まして、日本の閣議が始まったのは韓国の二時間後だった。

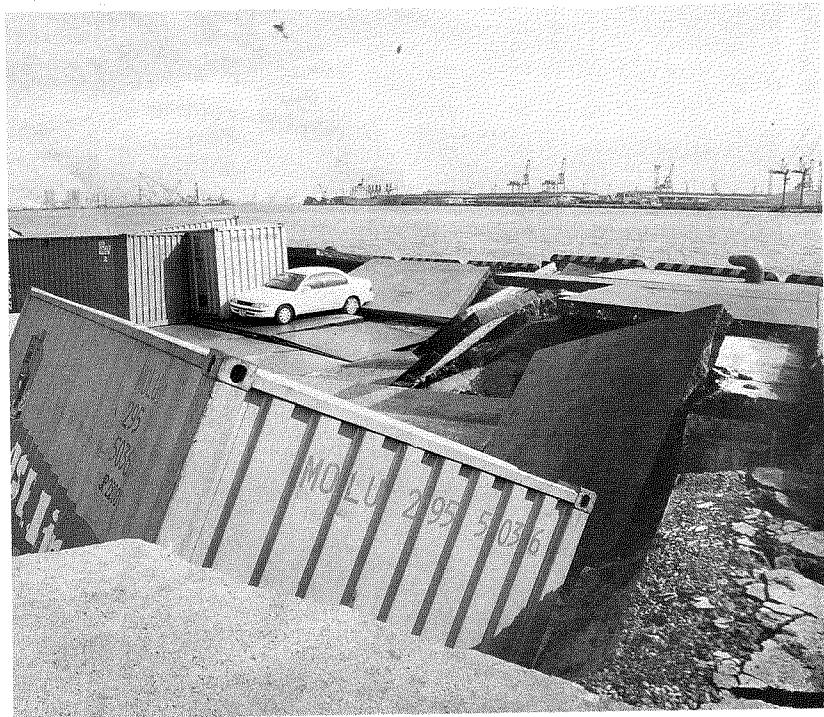
そのころ、神戸総領事裴宇坤（ペ・ウゴン）（五五）は神戸市中央区中山手通の総領事館の駐車場にいた。建物の電動シャッターが故障して入れない。領事三人を除く職員九人に、神戸から避難するように指示。マイカーで大阪の総領事館を目ざした。

昨年二月に神戸に赴任、三度目の日本だ。二号線を走る。町はつぶれ、黒煙が立ちのぼる。公衆電話には長い列、自動車電話も使えない。大使館と本国に現場状況だけでも報告せねば。東灘署に飛び込み、警察庁への専用線で韓国大使館を管内に持つ麻布署外事課へ。電話に出た外事課員に「神戸の韓国総領事です。多くの家がつぶれ、死者も多数。同胞の被害も大きいと見られる。このことを大使館に伝えてほしい」と叫んだ。

韓国大使館はこの一報を緊急電として

韓国外務省に打電した。電文を見た孔は八時五十分、東北アジア課職員七人、在外国民課職員十人で「日本関西地域非常対策本部」（本部長・金勝英、キム・スンヨン）在外国民領事局長）を設置。大使館も十分後、韓国民団中央本部事務総長の金忠一（キム・チュンイル）（六九）に電

話「本国に対策本部ができた。政府は人的被害の調査を急いでいる」と伝えた。韓国も神戸も動き始めた。地震が起きた日本で国土庁長官の小沢潔（三〇）を本部長とする非常災害対策本部がスタートしたのは隣国より二時間二十五分遅れの午前十一時十五分だった。戦後、三八度線を挟んで朝鮮民主主義人民共和国と対峙してきた韓国、ずっと平和だった日本。両国政府の危機意識の差は歴然としていた。



新港第六突堤

1936年に完成。西側が445メートル、東側が441メートルあり、コーヒーや米などの農産物の輸出に使われていた（神戸市中央区、1月17日撮影）